

令和3年2月26日

石巻専修大学  
学長 尾池 守 様

石巻専修大学 自己点検・評価に関する  
「外部評価委員会」 委員長 大谷 尚文

### 石巻専修大学に対する外部評価委員会報告書

令和2年度の石巻専修大学は（他大学も同様であろうが）新型コロナに振り回された一年であった。各専任教員・非常勤教員は、4月の段階から通常教室での対面授業か、オンライン授業による非対面授業かの選択が迫られたが、令和2年12月13日に石巻専修大学に新型コロナ感染者が発生し、その後、当該感染者との濃厚接触者の存在が発覚するに至って、学生を含め部外者の入構禁止という強い措置が講じられ、授業形態も全面的に非対面授業を余儀なくされた。おのずと、翌12月14日に予定されていた本年度の外部評価委員会も取りやめになった。私たち外部評価委員の気持ちを代弁して神成委員は、「直接、説明を聞くことができず誠に残念でありました」（p. 16. 以下、ページ数は「令和2年度石巻専修大学外部評価委員会」書面評価におけるページ数）と書いてくださったが、書面による外部評価委員会となったことも致し方ないことであった。新型コロナの蔓延という緊急事態に対処なさっている各教員・事務職員の皆様のご苦勞には心よりの敬意を表したい。矢口委員の、「丁寧なまとめがなされていて（矢口委員は、各外部評価委員に配布された、ファイルで綴じられた膨大な自己点検・評価の資料について語っている）、貴大学の「努力が生半可なものではなかった、ことが伝わってくるものでした」（p. 2）という評価は、このような背景で読むとき、さらにその重みを増すのではないだろうか。

にもかかわらず、コロナ禍の背後には石巻専修大学が抱えている諸問題がそっくりそのまま残っていると云わなければならない。だがこのコロナ禍は石巻専修大学にとって災厄であるにとどまらず、新しい見方を私たちに促すものであったかもしれない。以下は、書面でもっておこなわれた外部評価委員会における各委員のコメントと大学側との応答をまとめたものである。

## I 総評と提言

石巻専修大学が抱えている諸問題の一つとは言うまでもなく入学定員確保の問題である（これは大都市部から離れた地域に立地する、少子化問題に直面した小規模大学に共通する課題であるだろう）。私たち委員に配布された自己点検・評価の資料冒頭に掲載されている大学全体・学部・学科の入定員充足率と収定員充足率のグラフが、石巻専修大学の問題の所在を明示している。経営学部と理工

学部の食環境学科の入定員充足率と収定員充足率が抱えている難題である。これに対し、大学側は「今年（令和3年）4月に経営学部情報マネジメント学科を新設」し、「さらに、来年4月を目途に、理工学部と人間学部の教育課程の新編を進める」としている（p. 2）。的確な問題の把握とそれへの迅速な対処である。「きちんと振り返りがなされていて、PDCAのよき実例だ」（p. 12）と矢口委員は今回の自己点検・評価全体について最大級の賛辞を呈しているが、これがまさにその実例の一つであろう。新設される経営学部情報マネジメント学科、新編を進められつつある理工学部と人間学部の教育課程がいかなる成果を上げるかは是非とも知りたいところであるが、それは今後の自己点検・評価の問題であろう。

石巻専修大学が直面している諸問題は二つの方向性を持っている。大学内部の問題と大学外部との関係である。

### （1）大学の内部の問題

前回（第7回）の報告書で指摘した法人との関係は今後を待つとしても、上記の組織等の改変による教育の枠組みのほかに、個々の教育の現場という切実な問題が残っている。教育現場においては $1+1=2$ であるとは限らない。 $1+1$ は場合によっては3にも4にもなるが、0にもなりうるしマイナスになる可能性ももっている。 $1+1=2$ でしかないものを $1+1\rightarrow 3, 4$ にする可能性を武川委員は昨年度の外部評価委員会で「わくわく感」と呼び、今回はこれを「与えられるのではなく自らが作っていく感覚」（p. 2）と言い直してその意味を明確にしている。要するに、いまある自己から将来の自己への上昇であり、この上昇を大学生活がもたらしてくれるという期待感である。こうした文脈に置き直してみると全学教務委員会が提唱する「ループリック」（pp. 4-5）という概念の意味もおのずと明らかになる。それは創立当初の「わくわく感」を図表化し数値化したものである。創立30年を経過した石巻専修大学にとっては必要な措置と言わなければならない。「ループリック」の概念を打ち出す必要性は理解するが、「わくわく感」なり期待感を本当に図表化・数値化できるのだろうか。そこからはそれぞれの教員の個が抜け落ちているのではないだろうか。

武川委員はもう一つ重要な提言をおこなっている。「学修意欲の高い学生への対応」（p. 11）である。これについては各学部の学部長が丁寧な説明をおこなっているので、これでよしとしなければならない。じつはここがかかわってくるのは、前回の外部評価委員会で神成委員が述べた「世界観の大きさ」の問題である。と言うのは「学修意欲の高い学生」は、結果的に地域から羽ばたき、全日本・全世界へと躍り出すことになるからである（このことは地域にとどまり地域に貢献することと矛盾しない）。地域に根差した大学とは本質的に逆説的な概念だと言うべきだろう。

大谷委員は、いわば逆の提言をおこなっている。野球部や女子競走部の学生の

扱いの問題である。大学の看板を背負い、部活動に専念している彼らが、いわゆる学生生活を満喫できているかということである(p. 9)。これについて尾池学長は「アンケート調査等」で彼らの意識を調査することを検討したいと答えておられるが、それに補足説明を加えて、杉田経営学部長は「文武両道を目指す」と強い口調で書いている。じつは大谷委員が在籍中は「文武両道」という言葉は、忘れた頃に風の便りのように聞こえてくるだけであった。本学が「文武両道を目指す」のであれば、学部長でも全学教務委員長でもなく、学長が入学式の壇上でこれを宣言すべきではないだろうか。

## (2) 大学と外部との関係

これについて明石委員は傾聴に値するコメントをしている。長文になるが、全文を引用したい。「コロナで大都市の魅力が薄れ、当地区からも大都市の大学へとといった動きに多少なりとも変化を感じているところです。これは地元の大学に受験性や父兄の目を向けさせる逆にチャンスともいえるのではないか。大人数でのオープンキャンパスや説明会が難しい現状で、新たに大学を売り込む広報活動に大いに力を入れ工夫していただければと思います。／今までは多くの受験生が東京へ行きたいと願い、偏差値、キャンパスの印象とかで大学を選んでいたが、これからは大学や学部の魅力、講義の魅力等で大学が選ばれるようになっていくのではと思っていると同時にそうなることを期待しております。少子化で高校生が減少する中で志願者、入学者の動向に新たな変化や影響を与えるのではと考えております」(p. 10)。

新型コロナ禍をチャンスと捉えるべきだとする明石委員の視点については、付け加えるべき言葉を持たない。私たちはこのコメントを糧とすべきであろう。

地域に根差した大学とは本質的に矛盾をはらんだ概念だと述べたが、地域に根差す大学である石巻専修大学の地域貢献の仕方に細やかな眼差しを配っているのが神成委員である。神成委員は「石巻専修大学と圏域高等学校との懇談会」と「石巻地域連携コンソーシアム」において石巻専修大学が中心的な役割を果たしていることを高く評価しつつ、「懇談会」と「コンソーシアム」の構成機関が重なることを指摘している(p. 8)。大学側からは「会議運営を含め整理が必要」とあるとの回答をえている。これもまた次年度以降の自己点検・評価の格好の対象となるだろう。

最後に、石巻専修大学と石巻市役所との関係について大谷委員は懸念を抱いているということを申し添えておきたい。石巻市長と石巻専修大学長はタッグを組んで、お互いに不足な部分は補い合い、高め合って、新しい石巻圏域の発展に寄与すべきではないだろうか(p. 14)。

(気になった点があったので付け加えておきたい。それは矢口委員の「忙しすぎないでしょうか？」(p. 9)という疑問である。矢口委員は合同委員会が扱う範囲が広大で、それで「忙しすぎないでしょうか？」という懸念を合同委員会につ

いて表明しているのであるが、ここでは観点を拡大して、この自己点検・評価の作成に費やされた膨大な時間と労力のことと一般化して考えたい。この自己点検・評価の作成に費やされた膨大な時間と労力は、本来、研究と教育に費やされるべき時間と労力を削ってなされたもの、あるいはそのうえに積み重ねられたものではないかということである。もっとも、今回の自己点検・評価の資料のようすっきりした書式ができあがってしまえば、たとえ量的には膨大であっても、あとはその反復と修正で済むだろうから労力は軽減されると思われるが。

## II 新型コロナ禍のなかで

すでに述べたように、この一年は、教員は常勤、非常勤を問わず、オンラインによる非対面授業をしいられた。私が担当したのはフランス語関係の科目とフランス文学研究であった。とくにフランス文学研究はオンライン授業ならではの成果を上げた。フランス文学研究とは学生がそれぞれフランス文学史上の作品等について自らテーマを設定し、それについてA4判で10枚程度の作文をし、発表をするというものである。Zoomには共有という便利な機能が備わっているので（私はこれを相手の学生の指導で教えられた）、それぞれの学生が自分の原稿をパソコンに映し出し、必要があったら手直しをしながら原稿を読み上げるという形式でおこなわれた。今回は学生が小説等の梗概を発表し、そこから疑問点・問題点を探り出し、全員で討議するという形に自然に収斂した。学生たちがこれほど主体性を持って澁刺と授業をしたことは瞠目すべきものであった。石巻専修大学の学生たちの秘めた可能性を、オンライン授業を通じてかいま見た思いがした(p. 15)。

オンライン授業を通じて、現在の学生にとって、パソコンやスマホがいかに身近なツールであるかがよく理解できた。自己と自己表現が不可分であるとするれば、パソコン・スマホはいまや学生の自己そのものの自然な延長であると言っても過言ではない。大学、大学生活は学生が自己を映し出す鏡であるが、こうした迂路（と私のような年齢の者には見える）を通してこそ、石巻専修大学の学生は自己の美しい姿を見ることができるようではないだろうか。私がフランス文学研究でそれを見たように。おそらく通常の教室での対面授業の仕方も、こうした現在の学生文化に応じてデザインしなければならない。武川委員の言う「イノベーション」(p. 16)にはこうした授業方法も含まれるのかもしれない。